

弥生時代の人形土製品

ひとがたどせいひん

原始・古代の土製の人形といえば、

東日本の縄文時代の土偶や古墳時代の埴輪などが思い浮かびますが、弥生時代においても人の形をしたものや、顔が描かれた土製品が出土します。これらの用途は明確にはわかりませんが、弥生文化の特徴である農耕と結びつけられ、ムラ（集落）の農耕の祭りの道具として用いられたものであるという説や、完全な形で見つかることが少ないことから、人間の身代わりとしてけがれや病氣、厄災などを託して禊（まじ）を行うための形代として用いられ

た、など色々な説があります。

写真①は、杉遺跡（杉）から出土した分銅形土製品の一部です。分銅形土製品は、弥生時代中期中葉から後期前半（約二〇〇〇〜一八〇〇年前）に流行した土製品で、円形・楕円形・方形の粘土板の中ほどに左右からえぐりこみを入れ、江戸時代の秤に用いるおりの「分銅」のような形をしていることからこの名がついたものですが、しばしば上半部に目・鼻・口や眉毛が描かれたものもあり、人間の頭部から胸部を表現した土製品と思われる。

国内で約九〇〇例の出土のうち、七割以上が備前を中心とした吉備国（備前・備中・備後・美作）から出土していることから、古代吉備文化の特徴の一つとされており、分銅形土製品を用いた独自の祭祀が行われていたと考えられています。町内での出土はこの一点のみです。

写真②は、竹田遺跡（竹田）の竪穴住居の埋土の中から出土したものです。高さ九cm、幅三・三cmで、欠損箇所も多いですが頭部から胴体部分が残っており、顔の部分には大きな目と鼻、開いた口と眉毛が表現されています。左胸には乳房のような表現もあり、欠損していますが本来は左手を上に挙げていたような痕跡もみられます。頭部の右側には何を表現したもので

住居から出土したものです。高さ六cm、幅三・二cm、厚さ一・五cmで、楕円形状の粘土板の上部にえぐりこみを入れ、分銅形土製品にも似ていますが、分銅形土製品よりはえぐりが浅く、上下対称の形でもありません。上部に目と口を描き、鼻の部分はくぼんでいますが本来は鼻を表現する突起がっていたと思われる。鼻の欠損以外は完全な形です。

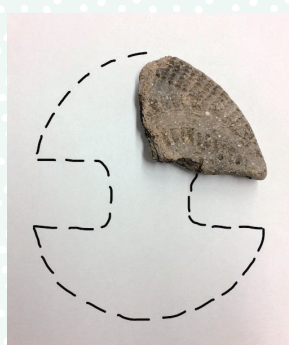
この人形土製品が出土した住居跡は、径一二mを測る県内でも最大級の規模の住居跡で、この他にもガラス製の装飾品や勾玉などの素材である碧玉という石材など特殊な遺物が出土しており、集落の中でも特別な位置付けであったことが想像できます。

これらの人形土製品はいずれも簡単な造形ですが、その形状や出土状況のあり方から、吉備圏内の特色を持っている。特殊な遺物とともに出土したりと弥生時代の精神生活を考える上で格好な資料となっています。

参考：『吉備の弥生時代』『吉備の考古学』『杉遺跡』『鏡野町史』考古資料編、「九番丁場遺跡」発掘調査報告書

かわかりませんが、角のような突起があります。この遺跡からは祭祀に使用されたと思われるミニチュアの土器や用途不明の土製品なども見つかっています。

写真③は九番丁場遺跡（布原）の竪穴



①杉遺跡の分銅形土製品



②竹田遺跡の人形土製品
(右は実測図)



③九番丁場遺跡の人形土製品

鏡野町教育委員会 生涯学習課 日下

電話(0868)54-7733